

記 者 提 供 資 料
2025 年（令和 7 年）11 月 11 日
文化・スポーツ室歴史文化財担当 （担当：稲原・中原）
電話：078-918-5629（内線：7545）

西岡構居跡の発見について

このたび、個人住宅建設工事に伴って、2025(令和 7)年 8 月初旬から下旬にかけて行われた発掘調査で、室町時代から安土桃山時代にかけての西岡構居に伴う堀が見つかりました。構居とは、中世の城郭の一つで土豪など有力武士の屋敷の周りに堀や土塁を巡らして、防御機能をもたせたものです。

調査地は明石市魚住町西岡^{あざおやしき}字御屋敷に所在しており、薬師院(ぼたん寺)の北約 100m、標高は約 9.3mを測る、瀬戸川右岸の段丘^{えんべんぶ}縁辺部に立地しています。

調査面積は約 80 m²で、調査区のはほぼ中央で、南北方向に直線的に延びる溝が見つかりました。検出された長さは 7.4m で、この堀の上端の幅は 2.5m、下端の幅は 1.5mありました。深さは 90cm で、堀の断面形は「コ」の字状をしていました。底部には 10～20cm 大の石が帯状に堆積していました。底部付近からは軒平瓦、青磁碗、土錘、蛸壺、須恵器こね鉢が出土しており、14 世紀から 15 世紀につくられたものであることがわかりました。その後、この堀は埋められますが、江戸時代になり幅を狭めて再度掘り直されたこともわかりました。

堀より約 10m 東側は、5.5m の比高差をもつ崖になって下に落ち、また南側に立地する薬師院に向かってもなだらかに下っています。1957 年の地形図によると、検出された堀より約 50m西に堀と平行に延びる道が描かれており、また、調査区の南北に堀と直交する向きに敷地境界線があり、その間も約 50m あることから、50m四方に堀を巡らし、その中に居館が存在していたことが伺えました。

元禄年間(1688～1704)に編さんされた『采邑私記』^{さいゆうしき}によると、西岡村に「有小城址土人称備前屋敷未詳何人」とあり、「備前屋敷」^{びぜんやしき}とよばれる城跡があったことがわかります。発掘調査が行われた場所は、字御屋敷の地名でこの備前屋敷と関連するものと考えられます。

今回、見つかった堀は構居に伴う堀である可能性が高く、発掘調査が行われた地点が、中世の西岡構居の一部に該当することがほぼ確かめられました。

明石市内で、構居に伴う堀が見つかったのは蟹坂^{かにがさかこうきよ}構居(和坂 2 丁目)について 2 例目となり、中世の時期の当地域の城のあり方を探るうえで極めて貴重な事例となりました。

なお、現地はすでに埋め戻していますが、出土した遺物の一部と遺跡のパネルは、明石市立文化博物館で 11 月 13 日(木)から開催する「発掘された明石の歴史展—船上城から明石城へ—」(2026 年1月 12 日(月)まで)にて、他の遺跡の出土品と共に展示します。



西岡構居跡全景（北から）



西岡構居跡の堀（検出された長さ 7.4m、
幅 2.5m）



堀



堀出土の瓦、土器等

